



中央大学との副将戦、久保選手が村上武選手にメン返しドウを決めて先制。この後村上選手の反則で二本目を奪って久保選手が勝利を収めた。

九州共立大学が九州学生優勝大会で2位という結果を残し、4年ぶりに本大会に出場した。平成24年に赴任した木寺英史監督は「常歩」を提唱し、今年「常歩剣道」伝統的打突法」を著した。伝統的な剣道の技術は、構えて左足に荷重したままの状態から打突を出したが、現在はいったん右に荷重し、左に戻して打っている選手がほとんどであると同書の中で木寺監督は指摘し、左荷重に戻すことで伝統的な剣道を取り戻せると主張している。その左荷重を部員たちが実践し始めて日は浅いのだが、早くも成果が出たという。

荷重に最も積極的に取り組んでいると木寺監督が評する2人に、大会を終えて2週間後、全日本女子学生優勝大会の会場で話を聞いた。
 久保選手（4年）は長崎県の五島高校出身。

「今の剣道は右、右、左、右で打つ剣道なんですけど、そうではなく、左に乗ったまま右で攻めて面、というようなイメージで稽古をずっとしていたら、自ずと感覚をつかんできました。僕は高校時代スター選手ではなかったのですが、強豪大学のそういう人に勝つには、昔ながらの……と木寺先生は言うんですが、左に乗った剣道じゃないと勝てないんです」

左に乗る剣道に変えると、どう違ってくるのか、與田選手の中ではそれが非常に明確になっている。「左重心だと体力もいらないうし、力もいらないうです。そして、この

“左荷重”で躍進した九州共立大学



久保直之選手。高校時代（福岡）は最高で団体県ベスト8。個人は緒戦で敗れることが多かった



與田正樹選手。高校時代（長崎）は団体で県3位、九州大会にも出場。個人では県ベスト8

剣道は絶対に勝てるというわけではないですが、初期段階として負けなくはなるんです。それは打たれなくなるから。ああ、ここじゃ打たれるなと思ったら、左に乗っているので行けますし、前に行けるようになったら次は左右を使えるようになります。右に乗っていたら下がるしかなんですけど、左に乗っているから前に行けるわけです」

與田選手にとっては学生時代最後の大会となったが、大学で左荷重の剣道を知ったことで、剣道がまったく変わったという。「180度変わりました。今までの常識が真逆なんです。当たり前のように言われてきたことが、違う。違うというのとはとらえ方が違うんでしょうね。ワンランク頭が良くなったと思います。（後輩たちも）こっ

ちの方が勝てるというのはいわかっていません。一生懸命頑張っているからできるというわけではなくて、その感覚にどこで気づけるかが大事だと思います」

一方、久保選手（3年）は福岡県の嘉穂高校出身。「左に重心を置いてやろうと本気で取り組んだのは、今年の5月の終わりがごろからで、まだ5カ月ぐらいです。最近左足に乗って打つというのがやっとなつかめたという感じなんです。今までは自分が打ちたいという気持ちで強くて、前に行っていました。手元が浮いてしまったりしていました。左重心の剣道を始めて出ばなの技などに重きを置くようになってから、自分の剣道のスタイルがまったく変わりました。與田さんも言われたように中学、高校時代に勝ってき

たわけではないので、スピードもやっぱり劣りますし、そこを補うにはどうしたらいいかと考えたときにそういう剣道になりました」

勝利をあげた今大会について久保選手はこう話す。「もう勝負がついていたので、木寺先生が言うような左重心の剣道に徹底できて思い切りやれました。それで中大の強い選手に対してああいう剣道ができたというのは、自信になりました」

九州共立大学は女子も全日本大会へ駒を進めた。他の部員も左荷重の剣道を意識はしていると2人は言う。そして、大会を終えると稽古中の雰囲気も変わってきたという。「メンバーに入っていない1年生2年生、そして3年生も現に目で見ただと、みんな稽古中も意識がガラッと変わってきました」（久保選手）

「2人だけ気づいて、偶然も重なったとはいえ九州2位になった。全員が気づいたらどうなるか楽しみですね」（與田選手）



常歩剣道 伝統的打突法
 木寺英史著・小社刊・B5版96ページ
 本体¥907+税 電子版もあり